

マンツーマン推進における判定基準の考え方

および

マンツーマン推進が目指す目的の再確認

2019/5/8

マンツーマン推進プロジェクト

## 1. マンツーマンコミッショナーによる判定の運用の考え方

- ・ U15世代のゲームにおいて、コミッショナーが判定の際にゲームの雰囲気을考慮してしまい、違反事象があっても黄旗・赤旗対応ができないケースがあった。  
(U12世代では事象があれば黄旗・赤旗対応をするように講習会等で周知をしていた)

## 2. マンツーマン推進プロジェクトの目的からの逸脱

- ・ 組織的ディフェンスの使用が見られ、プレーヤーに身につけさせたい習慣とは異なる狙いとなっている。
- ・ 「個の育成」というマンツーマン推進の目的が達成されない。
- ・ 「マンツーマンではない」と捉えられる事象があり、対応の整理が必要である。

## ● 考え方

コミッショナーは、ゲームの状況を考慮しながら判定を行うべきではなく、事象のみに対して客観的に判定する。

## ● 理由

心情やゲーム状況を考慮に入れながら判定することは、判定者の主観が大きく含まれることになり、判定基準の幅が広がることに繋がり、明確性に欠けることになる。

## ● 今後

ゲームにおいてコミッショナーが判定する際の考え方（事象のみに対して客観的に判定する）を周知徹底する。

ルールの変更ではないため、できる限り速やかに実施運用をお願いする。

全中ブロック・全中では実施する。

## ● そもそもなぜマンツーマン推進を行っているか

個の育成を行うため。

日本のバスケットボールの強化育成、そして日本バスケットボールの活性化に繋がる事業。

## ● 個の育成とは何を指しているのか

個人のオンボールのオフense・ディフェンス、オフボールのオフense・ディフェンスを身につけ向上させること。

- オンボールオフense : 個人で破っていく力、得点を取る力
  - ・ ショット、ドライブ、パス、1対1の駆け引き
- オンボールディフェンス : 個人で守りきる力
  - ・ ショット、ドライブを止める (インラインを守り続ける)
- オフボールオフense : スペーシング
  - ・ どこにいるか、どこへ動くか
  - タイミング
  - ・ いつ動くか
- オフボールディフェンス : ポジショニング
  - ・ マークマンをノーマークにしない
  - ・ ボールマンディフェンスを助ける
  - ビジョン
  - ・ ボールとマークマンを常に捉える
  - 予測する力

## ● 育成世代における戦術の利用

### (元日本代表HCジェリコ・パブリセビッチ氏の言葉より)

- 日本の指導者は戦術の研究に長けている。
- 一方で個の育成が不足している。
- 戦術を取り入れることでチームは勝利を得るかも知れないが、選手が得るものが少ない。
- 次の世代でチームが代わりコーチが代われればその戦術を使わない場合が多い。
- その選手は新たなコーチの元ではプレーできなくなる場合もある。
- これを避けるためには、どのコーチの元でも通用するものを身につけておくこと、これが土台となる。
- 育成世代ではポジションを早期に決めることなく、オールラウンドにプレーできるように指導することが大切である。

## ● 育成世代での戦術導入を多くしすぎないこと (提言)

- 戦術を取り入れるのは、チームの勝利を目指すことが優先されていないかを考えて欲しい。
- 育成世代の勝利は、大会結果や代表やトップ選手を作ることだけでなく、将来大きく成長する土台を植え付けること、バスケットボールを楽しむことができる選手を作ることと捉えていただきたい。
- オフェンスにおいても早期にスクリーンを導入することは個の突破力を高めることを阻害するとも考えられ、14~15歳頃からの導入が望ましいと考えている。

## ● 考え方(JBA技術委員会で話されている内容)

- ・国際大会で日本代表が対戦する相手は強く大きい。
- ・男女共に、ギャンブルを仕掛けるよりも、しっかり破れを作らないようにして守ることが優先と考えている。

## ● 国内で勝つことと国際で勝つことの違い

- ・育成指導者は国内で勝つことだけではなく、将来国際的に通用する選手を作る目標を持つ。
- ・国内で通用する戦術、国際で通用しない戦術は存在する。  
このことは何か、育成指導者全体で共有したい。

## ● アンダーカテゴリー代表での要求：オンボールディフェンス

- ・簡単にレイアップされず、一人で守りきる力を持つ。
- ・簡単にショットされないクローズアウトからのオンボールディフェンス、ドライブ対応力を身につける。

## ● アンダーカテゴリー代表での要求：オフボールディフェンス

- ・オーバーヘルプをしないようにしながら、オンボールディフェンスを助けるポジションを取り続ける。
- ・オーバーヘルプとはヘルプに行きすぎること。その結果ノーマークをある時間作ることになり、ローテーションが必要となること、強いチームはオーバーヘルプによってできた穴を見つけることにつながる。
- ・ボールとマークマンの両方をビジョンとしてとり続けることで、マークマンをノーマークにすることを防ぎ、何が次のプレーとして起こりそうかを予測することに繋がっていく。

## ● 育成世代指導者の考え方

スペインでは、育成世代でゾーンを行うことは指導者のモラルに反することと考えられている。育成世代の選手にゾーンを教えても将来プラスにならないのになぜ指導者がそれを教えるのか、という考え方である。

## ● 育成世代のコーチングの考え方を見直そう

誰のために、何のために、コーチングをするのでしょうか？

選手の成長できるための土台を作る助けをしてあげましょう。

将来を見据えた指導を行いましょう。

バスケットボールの楽しさを教え、徐々に競争を教えてあげましょう。

強化を目指す選手にはより高度なものを学ばせ、楽しさを重視する選手には楽しめる範囲でのやり方を教えてあげましょう。

## ● Basketball for LIFE

トップに辿り着いた選手も必ず引退します。トップに行った選手も行かなかった選手もずっとバスケットボールと良い形で関わって欲しい、それは普及に繋がっていきます。

人生の中でのバスケットボールを指導者は考えてあげるべきです。

育成年代からのバスケットボールとの関わり方が選手のバスケットボール人生に大いに関係しています。

このことを育成世代の指導者は常に頭に置かなければなりません。

「育成指導者は選手の未来に関わっている」

「育成指導者はバスケットボールの未来を創っている」